

FP Topics = 老後2,000万円問題について = 2019年10月号

★金融庁報告書について★

金融審議会から6月に出された報告書になりますが、この報告書が公になり、大きな騒ぎ？反響を呼んだ時点ですごく嬉しくなりました。実際に仕事で取り組んでいる分野がようやく日の目を見るのかと目の前が明るくなったような気がしました。しかし、実際のところ報告書は色々な大人の事情に利用され、政治的に利用される色が強くなっているのを見て、この問題についての発信は控えようとする想いが強くなりました。報告書の内容を捻じ曲げて発信する大人があまりにも多く悲しくもなっていました。

最近では政治的な発信もあまり聞かなくなりましたので、報告書は老後2,000万円問題をどのように論述していたのかを要約してみたいと思います。

金融審議会 市場ワーキング・グループ報告書 『高齢社会における資産形成・管理』

実際の報告書の名称は上記になります。「人生100年時代」と呼ばれるかつてない高齢社会を懸念して書かれた報告書です。この報告書をまとめたメンバーは、“市場ワーキング・グループ”とされ、学識経験者や金融機関などの専門家で構成されており、FP業界からも2名参加されています。その他オブザーバーとして、消費者庁・財務省・厚生労働省・国土交通省・日本銀行などが名を連ねています。

= 報告書の概要 =

《1》人口動態等

①長寿化

60歳の人約4分の1が95歳まで生きるという試算もあり、まさに「人生100年時代」を迎えようとしていることが統計からも確認できる。「健康寿命」にも言及している。

②単身世帯の増加

少子化等を背景として夫婦のみの世帯が割合を伸ばすとともに、未婚率の上昇やライフスタイルの多様化と相まって、近年単身世帯もその割合を急速に伸ばしている。今後もこうした傾向は続くものと思われる。老後の親の世話は子供がみるというようなかつて標準的と考えられてきたモデル世帯は空洞化してきている。

③認知症の増加

2025年には認知症の人は約700万人前後まで増加すると推計され、これは65歳以上の約5人に1人が該当することになる。これに起因する金融サービスにおける制限は多岐に渡る。今後、成年後見制度を利用する者が増加することが予想される。個人の金融資産の大半を高齢者が保有する状況に鑑みれば、同制度の枠組みに入る金融資産が大きく増加していくことが想定される中、これらをどう管理していくかは重要な課題の一つと言える。

《2》収入・支出の状況

①平均的収入・支出

わが国では、バブル崩壊以降、「失われた20年」とも呼ばれる景気停滞の中、賃金も長く伸び悩んできた。年齢層別に見ても、時系列で見ても、高齢の世帯を含む各世代の収入は全体的に低下傾向となっている。公的年金の水準については、今後調整されていくことが見込まれており、税・保険料の負担も年々増加しており、少子高齢化を踏まえると、今後もこの傾向は一層強まることが見込まれる。支出もほぼ収入と連動しており、過去と比較して大きく伸びていない。年齢層別に見ると、30代半ばから50代にかけて、過去と比較して低下が顕著であり、65歳以上においては、過去と比較してほぼ横ばいの傾向が見られる。60代以上の支出を詳しく見てみると、現役期と比べて、2～3割程度減少しており、これは時系列で見ても同様である。しかし、収入も年金給付に移行するなど減少しているため、高齢夫婦無職世帯の平均的な姿で見ると、毎月の赤字額は約5万円となっている。この毎月の赤字額は自身が保有する金融資産より補填することとなる。

②就労状況

わが国の高齢者は総じて元気である。これは、他国に比べて、また過去と比較しても当てはまる。2016年においては、65歳から69歳の男性の55%、女性の34%が働いており、これらの比率は世界でも格段に高い水準となっている。OECDの調査によれば、60歳から65歳の日本人の数的思考力や読解力のテストのスコアはOECD諸国の45歳から49歳の平均値と同じ水準となっている。こうした現状を踏まえれば、高齢者の就労継続は今後も続くのではないかと考えられる。

③退職金給付の状況

わが国に根付いてきた賃金制度として、退職給付制度がある。かつては退職金と年金給付の二つをベースに老後生活を営むことが一般的であったと考えられるが、公的年金とともに老後生活を支えてきた退職金給付額は近年減少してきている。退職金制度の有無、その給付金額は退職後の生活に大きな影響を及ぼすため、自身の退職金の見込みや動向については、早い段階からよく確認しておく必要がある。

《3》金融資産の保有状況

金融資産の保有状況は各人により様々であることから、平均的な姿をもって一概に述べることは難しい面があるが、全体的な傾向として、若年層よりもシニア層の方が全体に占める金融資産の保有割合が高く、この傾向は今後も続く見込みである。老後の生活においては年金などの収入で足らざる部分は、当然保有する金融資産から取り崩していくこととなる。65歳時点における金融資産の平均保有状況は、夫婦世帯、単身男性、単身女性のそれぞれで、2,252万円、1,552万円、1,506万円となっている。なお、住宅ローン等の負債を抱えている者もあり、そうした場合はネットの金融資産で見ることが重要である。《2》で述べた収入と支出の差である不足額約5万円が毎月発生する場合には、20年で約1,300万円、30年で約2,000万円の取崩しが必要になる。

早い時期から生涯の老後のライフ・マネープランを検討し、老後の資産取崩しなどの具体的なシミュレーションを行っていくことが重要であるといえる。

《4》金融環境に対する意識

内閣府が実施した世論調査では、「老後の生活設計を考えたことがある」と回答した人は、全体で67.8%。多数を占めた回答が「老後の生活が不安だから」であり、多くの人が老後生活に不安を抱えている現状がわかる。老後の不安として「お金」が主要要因となっていることが窺える。こうした老後の資金の不安に対して、どのように対処すればよいと考えているか。資産寿命を延ばすために必要なことを尋ねた調査によれば、「現役で働く期間を延ばす」、「生活費の節約」を挙げる回答が多いが、このほかに約3割の者は「若いうちから少しずつ資産形成に取り組む」を挙げている。だが、投資を行わない理由として上位を占めているのが、「まとまった資金がない」、「投資に関する知識がない」、「どのように有価証券を購入したらよいかわからない」という回答であり、顧客側の問題に加え、金融機関側が顧客のニーズや悩みに寄り添いきれていない状況が窺える。

基本的な視点及び考え方

《1》～《4》が高齢者を取り巻く環境変化についての現状整理である。

《1》長寿化に伴い、資産寿命を延ばすことが必要

前述のとおり、夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの無職の世帯では毎月の不足額の平均は約5万円であり、まだ20～30年の人生があるとすれば、不足額の総額は単純計算で1,300万円～2,000万円になる。この金額はあくまで平均の不足額から導き出したものであり、不足額は各々の収入・支出の状況やライフスタイル等によって大きく異なる。当然不足しない場合もありうるが、これまでより長く生きる以上、いずれにせよ今までより多くのお金が必要となり、長く生きることに応じて資産寿命を延ばすことが必要になってくるものと考えられる。

= 2,000万円問題に対する所感 =

以上が老後2,000万円問題に関する報告書の前半部分の要約になります。この部分だけで、2,000万円問題のあげ足りに関する内容は把握できたかと思います。私自身の感想では方向性には勿論賛同できますが、統計資料の数字をどこまで信用して良いのかが疑問です。平均値というデータを散見しますが、平均値よりも中央値を使用したほうが、より実態を把握できるように思えます。

報告書の後半部分では、2,000万円問題の対策を論述していますが、その中でアドバイザーの充実として、ファイナンシャルプランナーの名称も登場しています。ライフプランの重要性やライフステージといった文言も記述されており、国レベルの報告書にその重要性を認めていただけたことは、たいへん嬉しく思います。

～今月の山便り～

今頃の季節になると必ず思いだす山行があります。写真の前鬼川“孔雀又谷右股”という沢です。前鬼ブルーと評される澄み切った青がほんとに美しい沢です。ちょうど10月の終わり頃でしたが、今までの山登り経験の中で最長行動時間を記録しました。焚き火の写真は翌日の苦行を知っていたのか、もう死にそうな顔をしています。水の冷たさもあって、できるだけ体を濡らさないよう滝を直登せずに、巻いて歩いていました…その結果、孔雀岳へ詰め上げるルートをロストしていました。かなりのアルバイトを強いられ、下山につかう大峰奥駈道を発見できたのは夕方の5時。相棒にビバグして明日帰ろうと提案しましたが、明日は絶対に仕事を休めない…秋の落日は早く雨も降り出し、豪雨と雷鳴のなか奥駈道の最難所を通過するのは神経と体力を擦り減らしました。何よりも体温の低下が歩く速度を鈍らせたのだと思います。何とか避難小屋までたどり着き、休んでいる間も体の震えが止まらず、生まれたてのバンビ状態でした。少し小雨になり歩き出しましたが、車にたどり着いたのは午前2時過ぎ、この日の行動時間は19時間、最長記録です。このときはあまりに必死で不思議に感じませんでした。豪雨と雷鳴のなか方角に迷いヘッドランプで辺りを窺うと、木に反射シールのようなものが貼られてありました。進むべき方向を示してくれていたのです。それも1度や2度ではなかったように記憶しています。後日、よくよく考えるとそのテープは人が簡単に貼れるような位置に貼られてはいませんでした。かなり高いところ(3m～4m)にあったように思います。もしかすると、何か大きな力に助けをいただいたのかも知れません。また、鍛えなおしていつか再挑戦してみたいと思います。沢音を聞きながらの宴は最高に幸せです！

